

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：17102

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K21614

研究課題名（和文）芸術文化活動が社会包摂へとつながるプロセス

研究課題名（英文）The Processes in which Art Activities Contribute to Social Inclusion

研究代表者

中村 美亜（Nakamura, Mia）

九州大学・芸術工学研究院・准教授

研究者番号：20436695

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は実施期間がコロナ禍と重なったため、計画内容を変更して実施することになったが、当初想定されていなかった他の複数の研究プロジェクトとの連携により、さまざまな相乗効果が生まれた。一つは、芸術文化活動が社会包摂につながるために必要な条件やプロセスを整理し、それをハンドブックという形で出版したこと（日本語・英語）。もう一つは、イギリスの芸術人文学評議会(AHRC)の "The Cultural Value Project" の成果報告書を翻訳出版し、この本の内容をもとに日本への応用可能性を考えるオンライン公開研究会（全5回）を実施したことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究、及び本研究成果の積極的な社会発信によって、芸術文化活動が社会包摂につながるために必要な条件やプロセスについて具体的に理解されるようになった。特に専門家の実践知としてしか存在していなかったものが、本研究を通じて言語化・可視化されたことで、課題や可能性について広く議論されるようになった意義は大きい。また評価に関しても、現場において誤解や思い込みが軽減され、より実質的で意味のある評価が行われるようになってきた。

研究成果の概要（英文）：The implementation period for this study overlapped with the Corona Disaster, and thus the plan had to be modified. However, various synergistic effects were generated through collaboration with other research projects that were not originally envisioned. One was to organize the conditions and processes necessary for arts and cultural activities to lead to social inclusion, and to publish them in the form of a handbook (both in Japanese and English). Another was the translation and publication of the report of "The Cultural Value Project" that the Arts and Humanities Research Council (AHRC), UK conducted. Five on-line study sessions to consider the book's potential application in Japan were also held.

研究分野：文化政策／アートマネジメント

キーワード：社会包摂 芸術文化活動 プロセス 評価

1. 研究開始当初の背景

2010年代に入って、美術・音楽・演劇・身体表現等の芸術文化活動は、社会包摂 (social inclusion) の推進 (多様性を尊重しながら、協力し合う関係性を社会に広めていくこと) に貢献するという考え方が日本でも広まり、障害・高齢・貧困・引きこもり・外国人等の理由で、社会的に排除され孤立している人たちの参加に焦点をあてた芸術文化活動が盛んに行われるようになった。

研究開始時点では、2017年の「文化芸術基本法」の改正、2018年の「障害者の文化芸術活動の推進に関する法律」といった法律の整備、さらには、2020年(実際には2021年)の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けた文化プログラムの推進によっても、これらの活動は大きな後押しを受け、ますます大きな広まりを見せていた。

しかし、どのようなプロセスで芸術文化活動が社会包摂につながるのか、どうすれば芸術文化活動が社会包摂の推進に貢献できるかは曖昧なままで、一部のアーティストや実践家がそれらを実践知として持ってはいても、言語化されることはほとんどなく、文化政策の専門家ですえ説明に苦慮するという状況にあった。

2. 研究の目的

応募者の以前の研究から以下のような知見が得られている。

- ・ 芸術文化活動が社会包摂の機能を果たす際に鍵となるのは、マイノリティのエンパワメント (自己肯定感・効力感の向上) と異なる他者や社会のあり方に対するマジョリティの意識の変化である。
- ・ 芸術文化活動には、創作や鑑賞など異なる側面があり、効果をもたらす道筋は複数存在する。
- ・ エンパワメントや意識の変化を促す仕組みの理解には、関連分野の知見が有効である。

本研究は、以上を踏まえ、関連分野の知見の整理、エピソードの収集、インタビュー調査、以上の統合的考察を行うことで、芸術文化活動が社会包摂へとつながる道筋を類型化し、プロセスを理論的に説明可能にすることを目的にした。

本研究の成果は、共生社会の実現を目指した文化事業の制度設計や評価手法の開発に貢献するとともに、人間が芸術文化活動を行う意義についての本質的理解も深めると考えられる。

3. 研究の方法

本研究では、当初、以下の4つを実施することにしていた。ただし、実際には【 】内に記すように一部を変更して実施することとなった。

関連分野の知見の整理

創造性研究における「協働的創発」の概念、社会心理学における「エンパワメント理論」、マネジメント研究における「イノベーション創出のための環境条件」や「ファシリテーションスキル」などの関連分野の知見を整理し、相互関係を探る。【実際には、評価学の知見を多く活用することになった。】

エピソードの収集

国内外の先行事例に関するエピソードをインターネットや文献を通じて収集する。同時に、当該分野に詳しい専門家に、実践知を獲得していると思われるアーティストや実践家を推薦してもらい、これらのキーパーソン(約20名)にヒアリングを実施する。収集されたエピソードはロジックモデル(目標を達成するための手段を論理的に体系づける手法)を用いて表し、を参考に理論的裏づけを検討する。【実際には、他プロジェクトとの連携により50人超に話を聞くことができた。一方、ロジックモデルはプロセスの記述において活用した。】

インタビュー調査

をもとに、上記キーパーソンに芸術文化活動がエンパワメントや意識の変化を促す方法や道筋について考えを聞く。インタビューに際しては、実践知の言語化が困難なことに鑑み、の知見や で収集したエピソードの一部を提供しながら、ホルンスタインらの「アクティヴ・インタビュー」の手法を用いて、対話を通じて説明を生成してもらおう。適宜、マイノリティの意見を聞く等のフォローアップ調査、海外調査も実施する。【コロナ禍のため、海外調査は実施できなかった。】

統合的考察

を統合的に考察し、芸術文化活動が社会包摂へとつながる道筋を類型化し、プロセスを

理論的に説明可能にする。【コロナ禍により海外調査ができなかったため、本研究と関連するイギリスの大規模研究プロジェクトの報告書を翻訳することにした。】

4. 研究成果

本研究は、実施期間がコロナ禍と重なったため、計画内容を変更して実施することになったが、当初は想定されていなかった他の研究プロジェクトとの連携により、さまざまな相乗効果が生まれた。

関連分野の知見の整理

評価学の知見を活用することで、社会包摂につながる文化事業の評価に関わる誤解や課題を整理することができた(文献1)。「文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業」等との連携)。特に重要な概念としては、評価と測定の違い、課題解決型事業と価値創造型事業の違い、プロセス評価とアウトカム評価の整理、公共的価値の考え方、参加型評価の積極的活用など。

エピソードの収集、及び インタビュー調査

(1) 東京文化会館で実施された“Workshop Workshop! 2020 on stage & legacy”のフィールドワークを実施した(文献2、3)[公益財団法人東京都歴史文化財団の受託研究との連携]。高齢者・障害者施設等での参与観察6回、トレーニング講師や受講生へのインタビュー4回、社会包摂に関わる文化事業の実践者へのグループ及び単独インタビュー3回を行った。

以上の調査から、これまで曖昧にしか言語化されてこなかった社会包摂を意識したワークショップの意義やファシリテーターの役割が明らかになった。特に重要なのは、経験の豊かなアーティスト(兼ファシリテーター)は、社会福祉的な課題を解決しようとするのではなく、「音」や「動き」のあり方という、表現活動における目標を設定し、その目標達成を目指していた点だった。つまり、芸術的な課題に向けて創造的な活動を行い、新しい価値を生み出すことで、もともとあった課題を解決するという、いわば「価値創造を通じた課題解決」が重要であることが明らかになった。

(2) 「文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業」等と連携しながら、文化団体などに多数のインタビュー調査を実施した(文献1)。特にアーツコミッションヨコハマへのインタビューからは、芸術活動の成果・効果が、プロジェクトのデザインだけでなく、資金提供者側の助成プログラムのデザインとも深く関わっていることがわかった。また、厚生労働省「障害者芸術文化活動普及支援事業」第2回全国連絡会議への参加や、認知症ケアと関わる活動に従事している方へのインタビューからは、現場で遭遇する課題についても整理することができた。

(3) コロナが少し収まった2021年秋に、RISTEX-Solve for SDGs「認知症包摂型社会モデルに基づく多様な主体による共創のシナリオ策定」と連携し、認知症デイケア施設でワークショップの実施し、エピソードの収集やインタビュー調査を行った。本調査は2022年度から始まった科研費(基盤B及び萌芽)によって継承されている。

総合的考察

(1) これまで「文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業」等と連携して行ってきた社会包摂につながる芸術活動に関する研究の知見をまとめ、一般向けのわかりやすい書籍として刊行した(文献1)。また、オリジナルのハンドブックの英語版も作成した(文献4)。

ハンドブックにおいては、芸術文化活動が社会包摂につながるために必要な条件やプロセスを具体的に記述した他、現場に必要なコミュニケーションなどについても言及した。また、こうした活動の評価方法についても詳しく記した。

(2) コロナ禍でフィールド調査が難しかったため、イギリスの芸術人文学評議会(AHRC)の学際的研究プロジェクト“The Cultural Value Project”の成果を深く理解することに注力することにし、その成果報告書である *Understanding the Value of Arts and Culture* (2016)を翻訳し、出版した(文献5)。また、この本の内容をもとに日本への応用可能性を考える研究会(全5回)をオンラインで実施し、多くの方に視聴いただくこともできた(動画アーカイブ：<https://www.youtube.com/playlist?list=PLT5ge9I86UwrBj9nN9JPWchfCvksmj1tn>)。反響が大きく、書籍は発売後3ヶ月で重刷となった。

文献

1. 編著：文化庁×九州大学共同研究チーム編(2021)『文化事業のハンドブック:新たな価値を社会にひらく』水曜社
2. 単著：中村美亜(2020)「アートによる社会包摂的取組みに関する調査研究-音楽実践におけ

る創造性とウェルビーイングの視点から」公益財団法人東京都歴史文化財団
(<https://www.t-bunka.jp/about/pdf/research.pdf>)

3. 監修・共著：東京文化会館編(2020)『社会包摂につながるアート活動のためのガイドブック』
(https://www.t-bunka.jp/about/pdf/tbk_guidebook.pdf)
4. 英訳：The Agency for Cultural Affairs & Kyushu University Joint Research Team (2020),
Social Inclusion Through Culture and the Arts (3 volumes), Social Art Lab,
affiliated with the Faculty of Design, Kyushu University, Japan.
(<http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/publication/english/>)
5. 訳書：クロシク、カジンスカ(2022)『芸術文化の価値とは何か：個人や社会にもたらす変化とその評価』中村美亜訳、水曜社

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Mia Nakamura	4. 巻 49
2. 論文標題 Musical Conviviality in the otto & orabu Ensemble,	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 MINPAKU Anthropology Newsletter	6. 最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 中村美亜
2. 発表標題 イギリスの「文化的価値プロジェクト」を通して考える研究と評価の課題
3. 学会等名 日本文化政策学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Mia Nakamura
2. 発表標題 How to conduct a music workshop for diversity and inclusion, Performing Arts and Conviviality
3. 学会等名 Performing Arts and Conviviality (National Museum of Ethnology) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mia Nakamura
2. 発表標題 Real Root of Evaluation Problems
3. 学会等名 The 11th International Conference on Cultural Policy Research (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mia Nakamura, Yukiyo Sugiyama
2. 発表標題 Facilitator Roles and Strategies for Social Inclusion Workshops
3. 学会等名 Social Impact of Making Music (5th SIMM-posium) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村美亜
2. 発表標題 評価の目的設定と方法選択
3. 学会等名 アートミーツケア学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村美亜
2. 発表標題 文化事業の評価と社会包摂につながる芸術活動
3. 学会等名 日本文化政策学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 Mia Nakamura, Yuichiro Nagatsu, Tsukasa Muraya, donner le mot (NPO)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Social Art Lab, Faculty of Design, Kyushu University	5. 総ページ数 84
3. 書名 Social Inclusion through Culture and the Arts: A Practcal Evaluation Handbook	

1. 著者名 中村 美亜 (訳)、Geoffrey Crossick、Patrycja Kaszynska	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水曜社	5. 総ページ数 368
3. 書名 芸術文化の価値とは何か	

1. 著者名 文化庁 x 九州大学共同研究チーム	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水曜社	5. 総ページ数 240
3. 書名 文化事業の評価ハンドブック	

1. 著者名 The Agency for Cultural Affairs of Japan & Kyushu University Joint Research Team	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Social Art Lab, affiliated with the Faculty of Design, Kyushu University, Japan	5. 総ページ数 84
3. 書名 Social Inclusion Through Culture and the Arts: A Practical Evaluation Handbok Let ' s do it! Social Inclusion Through Culture and the Arts: A Practical Evaluation Handbook	

1. 著者名 Mia Nakamura, Yuichiro Nagatsu, Tsukasa Muraya, donner le mot (NPO)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Social Art Lab, Faculty of Design, Kyushu University	5. 総ページ数 68
3. 書名 Social Inclusion through Culture and the Arts: A Handbook for Beginners	

1. 著者名 Mia Nakamura, Yuichiro Nagatsu, Tsukasa Muraya, donner le mot (NPO)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Social Art Lab, Faculty of Design, Kyushu University	5. 総ページ数 74
3. 書名 Social Inclusion through Culture and the Arts: A Handbook for Evaluation	

1. 著者名 中村美亜（監修・執筆）、杉山幸代（ディレクション）、日下菜穂子、佐藤正之、原真理子、小川智紀、堤康彦、吉野さつき、梶奈生子、福井千鶴	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京文化会館	5. 総ページ数 104
3. 書名 東京文化会館編『社会包摂につながるアート活動のためのガイドブック』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>『芸術文化の価値とは何か』出版記念オンライン・トークイベント(全5回) https://www.youtube.com/playlist?list=PLT5ge9I86UwrBj9nN9JPWchfCvksmj1tn</p> <p>_Social Inclusion through Culture and the Arts_ (3 volumes) http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/english/publications.html</p> <p>東京文化会館編『社会包摂につながるアート活動のためのガイドブック』 https://www.t-bunka.jp/about/on_stage.html</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------